

Humanities and Social Sciences 分科会報告

— 共通テーマ設定の効果 —

村山 聡
(香川大学教育学部)

2010年8月24日から26日にかけて開催されたチェンマイ大学と香川大学との第3回合同シンポジウムにおいて、24日 (1)午前9時45分から10時45分、(2)午前11時15分から12時、さらに昼食休憩をはさんで、(3)午後1時から2時30分、さらに(4)午後3時15分から4時30分の4つのセッションが、人文社会科学分科会として組まれた。

すべてで15の報告がなされ、香川大学側から6報告、チェンマイ大学側から9報告がなされた。今回のシンポジウムにおいては、Healthy Aging Society という共通テーマが設けられていたこともあり、このテーマに関する報告が5報告あり、また、教育関連の報告が6報告、そして、経済学関係の報告が4報告あった。

経済学関係の報告は、香川大学側から自由貿易協定のインパクトに関する報告が1本、計量経済学的な報告がチェンマイ大学側から3本あった。純粋に個別専門分野に関する報告などにおいては、ディスカッサントを設けるなど、個別の専門分野以外の研究者が聴衆として参加していることにも今後は配慮が必要である。十分な準備の時間があれば、特別にセッション名などを個別に明確化して、そこでなされる議論の意味なども他分野の研究者にも理解してもらえるように工夫する必要があるかもしれない。

教育学関係は、留学生の動向ならびに対応のあり方などの制度的な側面に関する報告が3本、さらに、具体的な学生交流ならびに英語教育等に関する報告が3本あった。大学間のシンポジウムでもあり、大学の制度的な側面での討議の継続は意義があると思われるが、さらに踏み込んだ議論をしていくためには、具体的な教育課題などに今後は焦点化していくことも考えられるであろう。国や国家を越えたレベルでの問題点をより具体的な学生交流において、新たな試みなどにつなげていくような議論が今後も展開されることがさらに期待される。

共通テーマに関しては、今回のような設定が成功であったと考えられる。というのも、報告者において、当初想定していたメンバー以外にも報告者を得ることができたからである。このような合同シンポジウムにおいては、ややもすると、世話役が見通せる範囲で報告者などを想定していく傾向があると考えられるが、今回のようなテーマ設定の場合には、そのようなテーマ設定ならば報告をしてもよいだろうと考える参加者が出てくるからである。その意味で、チェンマイ大学側の世話役の中心として活躍された Daoroong Kangwanpong 前副学長にはその発案と共にそのご努力にこの場を借りて感謝の意を表したい。

具体的には、Liwa Pardthaisong-Chaipanich 氏の報告のように、日本とタイの高齢社会に関する調査報告がなされたこと、また、Miwa Koshiji 氏のように、日本人でありながらもチェンマイ大学を卒業し、現在大学院で研究を続けている研究者のタイの日本人会に関するインタビュー調査の報告などを聞くことができたからである。これらの報告者は、共通テーマに

関する他の報告者も含めて、前もって報告を依頼したわけではなく、今回のシンポジウムを通して、初めて知り合う機会を得ることができたものである。このような機会を通じて、今後新たな研究交流が生まれることも考えられるのであり、このような共通テーマの設定は確かに有意義なものであったと考える。